

## 正誤表

『グローバル・コミュニケーション研究』第4号（特別号）におきまして、以下の箇所に誤りがございました。お詫びして訂正いたします。

訂正箇所	誤	正
240 頁下から 2 行目	157 号	159 号

(2017 年 5 月)

# ワークショップ報告：言語管理とプロセス研究

## Workshop Report: Language Management and Process Studies

This report summarizes the main points raised in the “Language Management and Process Studies Workshop” held on 7th March, 2015 (Organizer: Language Management Association; Sponsor: Global Communication Institute, Kanda University of International Studies).

The workshop addressed two issues, both of which are important in order to further our understanding of language management and process studies. The first issue is the foundations of the language management theory (LMT). More and more researchers find it important to look back into the basic concepts as there has been significant development since the theory was first introduced by Neustupný and Jernudd in the 1980s. The second issue is the theoretical approach and methodology of LMT and conversational/interactional analysis, which also places a special emphasis on discourse and interaction. A talk session between two researchers and a discussion among participants in the workshop related to each issue were held.

キーワード：言語管理理論、言語接触、言語計画、相互行為分析、会話分析

### 1. はじめに

本稿は、2015年3月7日神田外語学院で行われたワークショップ「言語管理とプロセス研究」（主催：言語管理研究会；後援：神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所）において議論された内容をまとめたものである。

言語管理研究の基礎となるものはなにか、そしてプロセス研究の1つでもある言語管理理論と相互行為研究とはどのような射程の違いをもっているかを考えるために、ワークショップは、第1部「言語管理理論の基礎をさぐる」、第2部「言語管理研究とプロセス研究」、第3部「ディスカッション

ン」の3部構成で進められた。

## 2. 第1部「言語管理理論の基礎をさぐる」

1970年代の社会言語学の潮流から1980年代に入って提唱されるにいたった言語管理理論は、ミクロとマクロの言語問題研究の方法論として発展してきた。第1部では、言語管理理論がそれまでの研究とどのように異なっていたのか、提唱者の一人であるネウストプニーがどのような考えを持っていたのかを提示しながら意見交換した。以下、「言語管理理論の基礎をさぐる」のテーマについて行われた対談とディスカッションの内容を記す。

### 2.1. 対談

第1部の対談は、神田外語大学のサウクエン・ファン氏と国際大学の竹内明弘氏が担当した。

ファン：神田外語大学のファンと申します。よろしくお願いいたします。

竹内：国際大学の竹内と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本来ですと、ここに座っているのは東海大学の加藤先生なのですが、今回は私が参加します。

ファン：先ほど詳しく紹介していただいた内容をもう少し吟味して検討していけたらと思いますので、よろしくお願いいたします。時間は30分ということで、今回われわれの扱う論文は先ほど高先生がおっしゃった通り、ネウストプニー1985年の規範に関する論文、それからもう一つはネウストプニー先生とイェルヌッド先生の1987年の言語管理“*For whom*”というおもしろい題名の論文です。流れとしては、まず私から竹内先生にお伺いすると言う形で。

1987年の論文は言語管理ではなく language planning というタイトルが出されていますね。さっきもあったように、language management というこの言葉が具体的に出されたのがこの論文の中が多分最初だと思います。で、なぜ language management では

なく、language planning という言葉がタイトルに使われたのか、竹内先生にお伺いしたいです。そして、language planning が、実際どのようなことを指して使われていたのかもお話いただけたらと思います。

竹内：1990年代の論文にも言語計画という用語が使われていますが、それとは違って、1980年代のネウストブニー先生の language planning、あるいは言語計画という言葉は意味や文脈が異なっているようです。この点に関して、スポルスキーに引用されているネクパビルは以下のように説明しています。80年代にネウストブニーが使った言語計画という用語は、もともとは植民地主義の終焉にともなって発展途上国が独立国になっていく近代化の過程を適切に表せるように1960年代に使われるようになったものである、と。ちなみに1960年ごろの言語計画という言葉が指し示すものは、効率的な方法を身につけた技術的な専門家、いわゆるテクノクラートの専権事項で、その方法というのはイデオロギーや主観の入る余地のないもので、当時の社会計画とか経済計画をいったジャーゴンをモデルにした造語なんだともネクパビルは説明しています。

当時の言語計画の説明の中でインタレスト (interest) という言葉が出てくるんですが、これは日本語では利害関係や利権という言葉に当たると思うのですが、利権というと必然的に行政の承認が密接に関わってきますから、パワーとか権力とかという考え抜きには語れない極めて政治的な用語ですね。それにも関わらず、当時は言語計画というものは合理的な問題解決とみなされていたのだそうです。ネウストブニーも最初は言語計画をこのような文脈で使っていたのだと思われます。しかし、1990年代に入ってから言語計画という用語はこのような文脈からは脱却していて、意味合いも異なっています。

ファン：確かに、言語計画のキーワードの1つとして、やはり善の方向に持っていくというのが、ストラテジー以上のレベルの考え方に基

づいたものではないかという指摘があるんですね。改善すると言う名目上で出ていなくても、良い方向に持っていくというのは大前提になっていて。ですから、それを持っていくためには、やはり言語管理とは違うパワーが関わってくるということですね。つまり、パワーがなければ、ある人が考えている善の方向に持っていくことができないことは一般的ですので、かなりの力を加えないと、ある恣意的な方向に持っていくのが難しいのは、おそらく言語管理と言語計画の違いの大きな一部かなと、とても納得します。で、それで言語管理という言葉も出たんですけども、どういう風になら書かれたか、もうちょっと付け加えていただけたらと思います。

- 竹内: はい。それで、1990年代には、言語管理と言語計画という2つの用語はネウストプニーの中で整理されて、階層構造の中にきれいに収まるようになりました。しかし、現在、組織的管理と単純管理と呼ばれている2つの用語がありますが、この2つをどのように大きな枠組みの中で統合すべきなのかネウストプニー先生もいろいろと考えながら、論を進めている様子が窺えますね。これは集団が抱えているインタレスト、利権、利害といったものや、あるいは集団に関わってくる権力やパワーというものをどう扱うかが問題になっていたようです。インタレストという考えは、言語計画理論と実際の言語計画の全ての段階に密接に関わってきますので、これを使うと組織的管理の説明はすんなり行くのですが、個人の談話レベルの単純管理はインタレストという考え方で説明するのが難しい面があります。したがって、この2つの用語を統一して説明できる理論的な枠組みとして言語管理という用語が使われるようになったわけです。ネウストプニーの論文の中では、言語計画も言語管理プロセスを踏むとの記述があるので、言語管理の中に言語計画も包含されるという集合関係だと考えられます。
- ファン: どちらかと言うと言語管理の方がもっと広く言語問題を扱うことができるということを多分証明したかったんですね。

竹 内：そうですね。さまざまなプロセスを1つの用語で説明できますからね。

ファン：そうですね。はい。で、結構すごい野心的な提案だと思うんですけども、確かに interest ということは、この論文の1つの大きなポイントとなっている。さっきのプロセスの段階があって、どちらかというところ、その段階にあたる理論的な研究じゃないかなと思うんですけど。その逸脱についての留意というのは、特に language planning の場合は利害関係がはっきりとしていますので、わかりやすいですね。だけれども、いま先生がおっしゃったように個人の場合はどういう風に利害関係があるのかというのは、そういう自信がなくなったときに、実は見えてくるのは逸脱の留意という段階だけでなく、他の段階もあることが分かってくる。で、そのような言語問題も扱うべきでないかなという。それでこの言語管理の理論をもっと広くいろんな課題を使うことができるようにしたんじゃないかなと思うんですけど、どうでしょうかね。実際にその後も、言語管理のいくつかの段階についての論文は出てきます。こちらはどちらかというところ留意に関する論文ですけれども、もっともっとその後出たのは、例えば評価に関する論文が出たり、norm も後ほど出てきますけれども、それぞれの段階についての論文の1つとしてこれは留意についての論文として考えれば良さそうかなと思うんですけども。

竹 内：それではこちらからも伺いたいのですが、今度は1985年の Language Norms in Australian Japanese Contact Situation という論文についてファン先生にお尋ねします。この論文の中で、Weinreich 1953年、それから Haugen 1956年と1977年の考え方を引用して、これらは自分のアプローチは違うんだとネウストプニーはまず断っておいて、言語管理を提唱しているのです。私がお聞きしたいのは、どうしてネウストプニーがこの人たちの考えを引き合いに出して、それと自分の言語管理は違うんだと言っているのでしょうか。この点について教えていただけませんか。

ファン: はい。確かに論文の冒頭に大きく書いてあるのは、この理論は新しい理論であることと、それから今までのアプローチと全く違うということ強調していると思います。この論文だけじゃなくて他の論文の中でも、いかに言語管理理論が新しいのかということをよく強調しているところは目につくと思います。お配りした資料の1枚目にこの論文の冒頭で書かれたものを抜粋して簡単な翻訳を付けてみたのですが、ご覧いただいて、ネウストプニーはどのようにこの理論の特徴を考えているかを見てみましょう。

冒頭にあるのは、「言語接触 Languages in contact という言語接触を研究するために新しい研究の枠組みが社会言語の分野で開発されてきた、この枠組みは Weinreich と Haugen の構築してきたパラダイムと根本的に異なる」と書いてあります。それで、その新しいところとして4つの特徴が挙げられています。簡単な翻訳ですけれども、1番から4番まで読ませていただきます。1番は「複数の言語が接触する場面における言語的な変化のプロダクト(結果)に焦点を当てるよりも、そのような場面で起こる特定のプロセス(過程)をどのように理解すればよいかに注目すべきだ」と言うもの。つまりこれは研究対象をプロダクトだけにすると限界があるということですね。2番目の特徴としては、「接触場面で生じるほとんどの(すべてではないとしても)プロセスは訂正プロセスと呼ばれるものさまざまな段階かタイプを表している」ということです。つまり、訂正プロセスの存在とその研究の意義を主張している、これは新しいところとして出されています。そして3番目は「この新しい研究の枠組みは研究範囲を文法能力だけに限定するとまったく収穫が期待できないことを示唆している」ということです。つまり、これはよく私たちが注目しているように文法能力だけではなくコミュニケーション能力、インターアクション能力も研究の範囲の中に入れるべきということですね。で、4番の方は、「言語接触の研究は、言語の変化ではなく、談話プロセスを重視するのであれば、これから全く新しい研究方法を

開発しなければならないことは明らかである」ということが書いてあります。そしてこれは、フォローアップ・インタビューのことですね。

で、ちょっと戻りますと、ここに出ている言語接触と言うものなんですけども、実は言語接触の研究自体はそんなに新しいものではないんですね。ご存じのように、どこの国にもある昔の文献資料を扱う「文献学」、あるいは言語の歴史を扱う「言語史学」の研究者ならだれも疑問がなく、1つの言語の中に必ず外的要素が入っていたり、言語同士がお互いに影響し合ったりしているということがよく知られているんですね。でも、Weinreich と Haugen は 1950 年代にとっても有名な論文を出しましたね。この時代については後ほどちょっと触れたいと思います。1950 年代はいわゆる接触言語学 (contact linguistics) という学問の分野が少しずつできあがってきた時期だと思うんですけども、その中でだんだん従来の言語学の視点だけでは解決できない問題が見えてきました。ですから、対象自体は昔から存在していますが、どうやって研究するのかというのは従来の伝統的な言語学ではやっていけないところがわかってきました。そうするとですね、大体2つのストリームに分かれることになったと思うんですけども。1つは伝統的な言語学だけじゃなくて、心理学や、社会学や、人類学や、民族学と言った分野の研究としても扱うようになったことです。もう1つのストリームといえば、いわゆる学際的なアプローチの台頭と言えます。今は言語心理学、社会言語学、経済言語学、応用言語学、または ethnography of communication などの言葉をよく使いますが、最初はかなり邪道というイメージがあったのかも知れません。そういう感じで研究されていたと思います。

竹 内： そうしますと、伝統的な言語学というのは、学際的な要素がないということですね。

ファン： そうですね。

竹 内： 言語だけしか扱わない。

ファン: そこが少しおもしろいところなんですけれども。伝統的な言語学というのは私自身もあまり詳しくないんですけども、特に1930年代くらいから中心的になってきた構造主義の言語学 (structural linguistic school) が、ご存じのようにプラハ学派、ありますよね。それでネウストプニー先生もプラハで言語学をなさっていました。その構造主義の言語学は接触言語学にもものすごく影響したということは私たちも知らないといけないんですね。ネウストプニー先生1978年の東京大学で出版された本のタイトルも Post-Structural Approaches to Languages、そしてそれも1つの戦略だと言えるのだと思います。構造主義ですから、名前の通り、言語の構造を研究するものですので、自然に言語の現象に関わる問題、つまりプロダクトが研究の焦点になっていたことがそこにあったと言えるかなと思います。社会言語学のアプローチから扱う「接触言語学」では、当時、つまり1950年代60年代、一番成果を収めたのは「languages in contact」(言語間接触)と「linguistic borrowing」(言語的借用)という言語現象についての研究と言えます。ここでWeinreichとHaugenにつながるんですね。

竹内: WeinreichとHaugenは伝統的な言語学者だったんですね。どのような研究者だったんですか。研究成果はどんなものだったんでしょう。

ファン: さっきも紹介があったんですけども、Weinreichさんの一番大きな貢献は1953年に出版した Languages in Contact: Findings and Problems と言う本なんです。実はWeinreichは40歳でなくなって、この本が1953年に出版されたとき、彼は27歳でした。天才ですね。もっと長生きすればもっと貢献があったと思います。構造主義の影響を受けながらも彼が出した干渉 (interference) の理論は今も影響力がありますよね。彼は言語接触の際に生じる干渉の例を、音声・形態・統語・語彙の面での理論的解析だけでなく、二言語併用者の心理面・社会文化的側面にも研究の対象を広げて、とても高い評価を受けました。

Haugen の方は 88 歳まで長生きした人のようで、実は彼も同じたまたま 1953 年に *The Norwegian Language in America: A Study in Bilingual Behavior* という有名な本を出版したんです。その本は Weinreich と違って interference ではなくて、借用 (linguistic borrowing) でした。今もよく引用されていると思いますね。たまたま同時期に出版されたこの 2 つの研究は本来研究の内容が違っていたのに、何となく相乗効果があって、社会言語学的なアプローチから言語接触の問題を扱う学問分野の始まりとされていますね。彼らはどういう人なのかということなのですが、私みたいに漢字使用者でしたら、相手の漢字の名前のローマ字表記を見ると、大体中国人なのか、日本人なのか、韓国人なのか、相手の出身を見分けることができますが、Weinreich と Haugen という名前からは私の読み取れるものはゼロです。Weinreich and Haugen はいずれもアメリカの言語学者ですが、ヨーロッパ人であれば、おそらく何となく名前のスペルから彼らの出身を推測することができると思いますね。実は Weinreich はポーランド出身のユダヤ人で、小さいときに家族と一緒にアメリカに移住したのですが、Yiddish というユダヤ人の使う言語の専門家でもあります。

Haugen とは大変ノルウェー語の響きの強い言葉であることをご存知の方がいらっしゃるかもしれません。Haugen はアメリカと故郷のノルウェーと行き来していた時期もありました。彼は方言研究の大御所でもあることは興味深いです。

彼らの研究の意義を理解するために、出身だけではなく、彼らの置かれた時代も大変重要な手掛かりになりますね。1950 年代とは第 2 次世界大戦の直後ですね。この時期の世界はまさに移動の世界であったことは言うまでもありません。人々は一時的な避難のための移動ではなく、自分の国を離れて、新しい定住の場を求めています。ですから、言語問題への関心はどうしても「問題の由来」、「問題の特定」、やがて「問題の解決」に集中し、今でいうと、言語計画的な見方が強かったと言えます。Weinreich and

Haugen は自分と同じように英語母語話者ではない移民たちはどうやってアメリカの社会でやっていけるのかは言語接触の研究で貢献しました。

竹 内: Weinreich and Haugen は構造主義を超えたところで論文を書いているのですが、ネウストプニーはそれとも違うんだという。最終的にネウストプニーが強調したかったことは何だったんでしょう。

ファン: 私から見ると、時代が変わったということはネウストプニーが痛感したんじゃないかなと思います。ネウストプニー先生は1960年代のはじめに大学教授に正規雇用されて、チェコからオーストラリアに移住されたんですけど。言語管理理論の揺籃期と言える1973年に発表された論文からも、ネウストプニー先生は時代が変わったということを示唆していましたね。近代社会、やがてポストモダン社会の到来に伴って、言語接触による言語問題、つまり language problem が変質しつつあると痛感したようですね。そんな中、研究対象を見直して、新しい研究のアプローチと新しい研究の方法を開発しなければ、時代に合うような言語研究に限界を感じたわけです。1985年の出されたこの論文では、表面化された言語現象の問題だけ扱わないようにしよう、言語問題の次元と範囲をもっと広げよう、そもそも言語だけに集中しないで社会文化の側面も視野に入れよう、文献学的な研究方法から解放しよう、などの訴えがあるのですが、構造主義言語学の殿堂とも言えるブラハ学派の元音韻論研究者にとっては、なかなか斬新的で勇気の必要なものだったのではないかと思います。

蛇足ですが、Haugen は1970年代に東京で言語計画について講演した時、この分野の傑出した理論家の1人としてネウストプニーの名前を挙げたそうです。時代がまた更に変わり、言語管理理論はもう古くなったのか、それともネウストプニーがかなり先を読むことができて、今ようやく理解されるようになってきたのかと言うことは、私たち弟子が検証することになるのでしょうか。

## 2.2. ディスカッション

第1部のディスカッションでは、主に言語管理理論の規範に焦点をあてて、ネウストプニーがなぜ規範にこだわっていたのか、そもそも規範（基底規範）とはどのようなものなのか、多言語話者の場合には規範はどうなっているのかなどについて話し合いが行われた。以下、その3点について議論された内容を記す。

### (1) ネウストプニーはなぜ規範にこだわっていたのか

ネウストプニーがいう言語問題は規範からの逸脱のことである。よって、規範自体が定まっていなければそれが逸脱だと言うことはできないし、言語問題の正体も見つけることはできない。また関連した理由として、彼がプラハの言語学者であったことも挙げられる。先の言語問題の考え方からすると norm（規範）がなければ言語学自体が成立しないことになる。これらが、彼が規範を重要視していた理由ではないかと議論された。

### (2) そもそも規範（基底規範）とはどのようなものなのか

まず規範でよく誤解されているのは、すでに何らかの規範があつて人びとはそれを選択していると考えられている点だと思うが、そうではなく規範はその場で選択されるものである。言い換えるなら、日本語のネイティブ・スピーカー（以下、NS）とノンネイティブ・スピーカー（以下、NNS）がいたからといって日本語が規範になるわけではなく、その場においてたまたま日本語が選択されているわけである。別の言い方をすれば、規範は決定要素ではなく一般ストラテジー（これもプラハ学派の用語）であるとも言える。

また規範は、そのシチュエーション、コンテクストなどによって選択されている。すなわち、その場から離れれば存在しないものである。期待はされている可能性があるが、それは規範ではない。先の日本語のNSとNNSの例で言うと、日本でその会話が行われるのであれば「日本語を話すだろう」という期待はあるが、それは規範ではないし絶対でもないということである。

一方で、規範は会話の全体に及ぶようなものでもない。例えばNNSが自分の日本語の発音を規範からの逸脱として留意した場合、その時点では日本語母語話者の規範が使われたことになる。しかし、第三者言語接触場面においては同じ発音でもあまり気にしなくなることがある。つまりそこで使われる規範は別の規範ということになる。コード・スイッチングがされるような場面についても同様のことが言えるだろう。言語管理を使って規範をみるということは、特定の場面で、あるポイントについてこのような規範が見られたという記述をするということである。そのため、規範自体を全て明らかにすることは非常に難しい。

しかし、だからこそ言語管理の理論は規範からの逸脱から始まると言うこともできる。例えば誰かが怪我をした時は、その時に初めて怪我をしたことに気づく。すなわち怪我をしていなければ普段の状態に気づくことはできない。言語問題も同様で、規範を全て記述することはできなくても、問題が起きたところでその問題とその部分の規範を記述することができるわけである。そこがおもしろい点なのかもしれない。ただ研究を進めていく上では、「規範はどのような規範なのか」など様々な質問をされたりするので、分析が難しいという点も考える必要がある。

### (3) 多言語話者の場合規範はどうなっているのか

近年はこの規範の捉え方も複雑化している。言語管理理論が提唱された1985年の時点では規範は1つだけだと考えられてきたが、多言語話者同士が会話をする時規範は2つ以上にもなり得る。例えば東京の家庭内で娘が東京弁、母親が大阪弁で会話される場面、あるいは同様の状況で日本語と英語で会話される場面において、言語問題が生じないような場合である。このような場合は会話の参加者それぞれに2つの規範が存在していることが考えられ、言語管理も行われていない。どちらかに問題が生じた時(例えば分からない言葉が出てきた時など)にのみ言語管理が行われるのである。2つの規範(dual norm)という点に関してはネウストプニーの2005年の論文に言及されている。

### 3. 第2部「言語管理研究とプロセス研究」

第2部「言語管理研究とプロセス研究」では、2000年代に入り注目されてきた相互行為研究とのかかわりから言語管理研究のプロセス研究としての側面について議論を行った。以下は「言語管理研究とプロセス研究」のテーマについて行われた対談とディスカッションの内容を記す。

#### 3.1. 対談

第2部の対談は、国立情報学研究所の菊地浩平氏と昭和女子大学の大場美和子氏が担当した。

菊 地：菊地です。今回対談ということで指名をいただきましてどう進めるのが、ワークショップにとって良いのかいろいろ考えました。事前の調整が充分にできなかったこともあってもしかしたら不十分なところもあるかもしれませんが、言語管理研究と相互行為研究というものの関わりについてテキストになっている論文を読んで考えたことを話してみたいと思います。ただし私たちは両者の関わりについて何か答えを持っているという立場でここに来ていません。皆さんと同じようにいろいろな悩みがあって、それぞれどういった解決・解釈がありうるだろうかと考えているという立場でここにいます。ですので、私たちの問いかけとコメントを皆さんで反芻していただいて、第3部のディスカッションで役立てていただければと思っています。ということで、よろしくお願ひします。

最初に、どういう立場で論文を読んで話をさせていただくかということをお話ししておいた方が、皆さんがこの話をどのように聞けばいいのかということのガイドになると思うので用意してまいりました。私は相互行為分析をやっていて、言語管理研究にも共感があるという立場です。研究の主なトピックは、ずっと手話会話での順番交替です。順番交替といえば Sacks et al. (1974) の議論が代表的ですが、これは英語の会話での順番交替の分析になっ

ています。この順番交替が手話の場合はどうなっているのかという議論があってもいいはずだろうと考えて研究してきました。最近では段々複雑になってきていて、通訳者が入った会話にも関心を持っています。通訳者は従来の通訳理論では基本的に透明な見えない存在で、その場の相互行為には影響を与えない存在だと考えられてきたわけですが、そうではなくて、見えるし相互行為に影響を与える存在だという立場で見てみたら何が見えるかということに関心があります。それから、そういう場面で通訳者というのは Goffman (1981:124-159) が言っている意味での参与地位、話し手なのか聞き手なのか、あるいは、傍観者なのかという意味での参与地位を、通訳者はどうやって管理しているのかということを考えています。論文も本当は大場さんのように載せたいと思ったんですけども、おそらく皆さんがよく読む雑誌だとかジャーナルには全く投稿していないので興味があれば私の名前と章で検索していただくとたくさん出てくると思うのももしよろしければ見ていただければと思います。というのが私の基本的な立ち位置になります。はい。

大場: では、私の方は何をしているかと聞かれたら、日本語教育と会話データ分析をしていると答えています。高校生の頃から日本語の先生になりたいという一心でやってきたのですが、実際に日本語教育の現場に立つと、学習者とのやりとり、つまり接触場面のやりとりに色々留意することがありました。その留意したことについて勉強する過程でネウストプニー先生の論文に出会い、もっと勉強しようと進学して村岡先生のもとで言語管理理論を少し勉強したということになります。そしてずっと接触場面の会話のやりとりを見てきたので、結果として相互行為理論も少し勉強したということになります。

多様な研究の立場があるとは思いますが、最近は、共同研究者の中井陽子さん(東京外国語大学)や寅丸真澄さん(早稲田大学)と一緒に、「会話データ分析」(中井、2012)という用語を使い、包

括的な概念で、談話レベルで会話のやりとりを分析する多様な研究をとらえなおし、これまでどのような会話データ分析の研究が行われてきたのかというメタ研究を行ってきています<sup>1)</sup>。言語管理理論で行う研究も相互行為理論で行う研究も、会話データを対象として談話でレベルの分析を行ってれば、会話データ分析としてとらえられます。

この会話データ分析という表現の初出が中井(2012)で、パワーポイントにあるように、寅丸他(2012)、大場他(2014)などの文献調査を行った結果、これまで非常に多様な会話データ分析の研究が行われているということがわかってきました。

私は、最初の出発点が日本語教育なので、このような研究で明らかになった知見は、やはり実践現場へ還元したいと考えています。社会言語科学会では、中井さんが中心になって「会話データ分析のむこう」というタイトルでワークショップを行いました(中井他、2012)。会話データ分析による研究を行ったその先、つまり会話データ分析の「むこう」をめざしたいということです。私の場合は日本語教育の実践現場への還元になりますが、相互行為理論や言語管理理論も使って研究を行い、「むこう」をめざしているという立場になります。

菊 地： こういう2人の対談になります。皆さん既にテキスト(西阪、1997)になっているものについては読んできていると思いますけれども、これは相互行為分析という視点から異文化間のコミュニケーションというものを考えよう、その中でコミュニケーションの参加者たちがしていることを記述しようということが目的になっていて、1章から終章まで全体を通してそういう関心で書かれているものです。このテキストを選んだ理由については、次のような理由です。つまり、私たちは言語管理研究、接触場面研究、日本語教育を研究しているわけですが、そういった領域とは異なる文脈で異文化間コミュニケーションを考えている非常に良い例であろうということです。テキストの中にカテゴリーと結びつい

た活動という議論が出てきたと思うんですけども、それはこのテキストを理解する上で重要なポイントになっているのだろうという気がしています。このあとの対談でそのことに触れながら話せればいいかなと思うんですが、おおざっぱにカテゴリーと結びついた活動とはどういうものかということをござっくりと言っておきますと、学習者と教師がカテゴリー対であるとしみます。皆さんもそのことについて異論はないと思うんですけども、学習者というカテゴリーに結びついた活動は何かと言うと、おそらくそれは教師に質問することができる権利を持つと言うことだろうと思います。また教師の場合であれば、学習者の誤用を訂正することができる、ということだろうと思います。実際にできるということではなくて、そのような期待があるということです。カテゴリーに対して一般的に何をすることが適切であるか、という期待がへばりついているというのがカテゴリー対とカテゴリーに結びついた活動のおおざっぱな意味です。おそらく元の英語だとカテゴリー・バウンデッド・アクティビティ (category bounded activity) という言い方をしているんですけども、カテゴリーに縛り付けられているというか、ぴったりとくっついている活動、期待されている活動ということになります。

それ以外にも、このテキストの中には重要なポイントがいくつもあったと思うんですけども、それらを踏まえた上で「観察可能であるということの含意は何か」という問いかけをしてみたいと思います。これは観察可能であるということの言語管理研究、あるいは接触場面研究に対する含意ということです。それから「カテゴリーに結びついた活動への規範的期待ということがいかに研究と関わってくるのか」という二つの問いかけをしてみたいと思います。

1つ目の問いかけですが、これは「ある発話の中のある特定の部分が言い間違いである、または誤用である事を判断できるのは誰か」「言い間違いがあったということを観察することは誰にとって可

能であるのか」ということに関連した問いです。そしてある発話の中での特定の部分を言い間違いや語用であると判断・観察した人の中で、それを訂正することができるのは誰か、というようなことを考えてみても良いのかなというふうに思っています。ある言語使用を言語問題として留意するということは参加者にとっては普段からしていることですし誰でもやっていることなんですが、話している本人が気づいている、話している本人は気づいていないけれども他の人は気づいているという形でいくつかのパターンがあるんだろうと思います。それは言語管理研究の中でも多くの議論があります。さらに、誰がマークして誰が調整するのかということが出てくると思うのですけれども、例えばそれは学習者が話していることのなかで、学習者が気づいていないけれども教師はそれに気づいている、ということが出てくると思います。学習者本人が気づいていないことを教師が他者マークして、更に他者調整・他者訂正するということは、教師と生徒というカテゴリー対と結びついた活動という観点から見ると、これは活動に参加している人たち自身が適切な行為だと認識している、言い換えれば規範的秩序の一部であるということができると思います。

一方で言語管理理論では、個人の言語管理を特に集中して見ているという感じがしています。まず参与者同士がそういったカテゴリーや、カテゴリーに結びついた活動といった規範を元に、その場の規範的秩序を構成していることを示した上で、それぞれの言語管理プロセスというものを記述するならば、それは個人の管理ではなくて、おそらく相互管理ということを書ける可能性がある記述になるのではないかという気がしています。

大場さんに対して、私が伺いたいことなんですけれども、会話データ分析という中で今日のテキストに出てきたカテゴリー対だとか、カテゴリーに結びついた活動といった概念を活かせる、あるいはこういう部分で非常に理解を助けることにつながるといったことがあれば、そのあたりについて伺いたいと思って、この問い

を用意してみました。先に大場さんの方に進んでゆきます。

大 場: 私にはどちらの理論もアウェイな感じなので、日本語教育、会話データ分析をしているという立場から、このテキストを読んで少し疑問に思った3点について取り上げたいと思います。

まず、1点目は、2つの理論の出発点の違いとして、相互行為理論が観察可能なやりとりを対象としているのに対し、言語管理理論は当事者の問題の認識から始まるのではないかということです。次に、2点目は、同じプロセスという表現を使っているにもかかわらず、プロセスの対象は異なると考えられる点です。相互行為理論は発話連鎖などの相互行為のプロセスを記述することに関心があるのではないかとされるのですが、言語管理理論は留意した問題を解決するその管理のプロセスではないかと考えられるということです。最後に、3点目は、その2つの理論がめざすところは何かと考えると、テキストにはおそらく規範的秩序とあったと思いますが、相互行為理論は相互行為のルール of 記述であると思われるのに対し、おそらく言語管理理論は管理のプロセスをモデル化していくことなのではないか、と少し怪しい理解をしております。後者は、Neustupný (1994) を読んで考えたことです。

そして、先ほど述べましたように、私の場合は、ある場面のやりとりの実態を明らかにして、その研究成果を日本語教育の実践現場に還元することをめざすという立場です。これは、実は先ほどの菊地さんの1点目の「観察可能であるということの含意は何か」という問いにつながりますので、先ほどの菊地さんの1点目に対するコメントという形で、私の疑問をご提示したいと思います。相互行為理論に関しては観察が可能であるということ、それから、言語管理理論に関しては当事者であるということについてはどのように整理ができるのかと疑問に思っています。先ほどあったように、学習者の気づかないミスに教師が気づくといった場合に、問題は第三者として外から管理のプロセスを学習者の立場で分析するということになるのでしょうか。第1部を聞いていますと

規範はあくまでも個人に帰属するであろうと理解しましたので、当事者であるということに関していうなら、問題の認識は、第三者でもあったり、発話者でもあったりと、誰でもあり得るのではないかと思いました。その当事者の範囲が一体どこまでかが疑問にあるということです。観察可能であることに関しては、調整計画を実施したものの回避してしまった場合など、やはり観察可能ではないこともあるのではないかと、教師として日本語の授業をやっていると経験的に感じます。この場合はどうなるのかという疑問がわきます。

第1部を聞きながら疑問に思ったので、この Neustupný (1994) をもう一度読んで「当事者」が元の論文ではどう述べているのかみると「particular speakers」となっていて、複数形なのだと驚きました。ただ、この論文ではマクロレベルとの対比で、特定のディスコースの particular speakers というふう述べているのだとは思いますが、つまり、当事者といふ訳してしまい、また、そのように理解していたのですが、実際のやりとりとは個人として説明できるものではなく、また、そもそも Neustupný (1994) がどこまで「particular speakers」を指していたのかも少々理解できていないのですが、観察可能であるということと、当事者、「particular speakers」の概念の整理ができたなら、というふうと考えているというのが1点目の「観察可能であるということの含意は何か」という問いかけへのコメントになります。

次に、2点目のプロセスに関しては、同じプロセスという表現を使っても異なる概念を表わしているということも、もう少し整理した方がいいのではないかと考えています。つまり、相互行為理論の発話連鎖などのプロセスと、言語管理理論の逸脱から調整といった問題の管理のプロセスは、異なる対象を見ていると考えるためです。また、表面上に現れるものと現れないものという違いもあると思います。さらに、西阪(1997)がフォローアップ・インタビューの是非について、フォローアップ・インタビューを

したからといって必ずしも正しいわけではなく、必ずしもその行為がわかるわけではないというようなことを述べています。ただ、これに関しては、もともとネウストプニー先生も述べていることで、一般的にみても、フォローアップ・インタビューに関して誤解があるかと思われました。おそらく言語管理理論も管理のプロセスを理解するための手段としてフォローアップ・インタビューが出たのではないかと理解しているのですが、異なる立場でフォローアップ・インタビューを行っている人たちもいますし、また、まるでその場面のやりとりの実態がわかる手段であるかのようにフォローアップ・インタビューに対する過度な期待を持つ人もいるかとも思います。でも、言語管理理論では、あくまでも二次データとしてフォローアップ・インタビューでの報告内容を分析に使っていると思いますし、あくまでも管理のプロセスを見るための手段ではないかと考えています。フォローアップ・インタビューは、言語管理理論では、やはり、管理のプロセスを見るための手続きに従って行っていくものかと思しますので、フォローアップ・インタビューの効果と限界を確認した上でを行い、接触場面を分析するにあたって、その効果や有効性をむしろ多分野へ主張・発信できたらいいのではないかと率直に思いました。というのは、1点目と関係しますが、やはり、観察可能なもののみを対象として見る相互行為理論に対する素朴な疑問があるためです。

最後に3点目に関しては、2つの研究理論が目指すものの違いについて、私の理解ですが、相互行為分析は相互行為のルールを記述することによって規範を見いだそうとしているのに対し、言語管理理論は管理のモデルを作ろうとしているのだらうかと考えているのですが、いずれにせよ、具体的なデータをふまえて抽象化することを行っているという点では共通しているかと考えられます。目的によって分析結果を抽象化するのはどの研究も同じであると考えられるのですが、その抽象化の目的が異なるので、その

方法がそれぞれ異なっているのかと考えています。ただ実態を記述するだけでは報告でしかないので、抽象化することによって多分野で具体的に議論を行う可能性も出てくるのではないだろうかと思います。最初に述べたように、会話データ分析と包括的にとらえて研究動向のメタ研究を行った結果から多くを学ぶことができたので、なるべく多様な分野の人と仲良くやれる方向でコメントをしてみました。私からは以上の3点です。

菊 地：私も今の大場さんから私の問いかけについていくつかお答えを頂いたので、私もお答えしたいと思います。観察可能であるということ今の大場さんのコメントを聞きながら、考えていました。私も観察可能なのは誰か、誰が観察可能なのかという意味で使っています。例えば、先ほどこの場面が秩序ですという言い方を紹介の部分でしましたけれども、多分それはドアの向こうにいる人がこの場面を見ても何をしているかわかるという意味で観察可能という言い方をするんだと思います<sup>2)</sup>。つまり外にいる人たちというのは、その場面の当事者・参与者ではない人たち、パティキュラスピーカーズ (particular speakers) というところからも漏れる人たちだと思うんですけども、そういった人にすら観察可能であるということなのだと思います。こういった相互行為分析でいうところの観察可能性にこだわる必要はないんですが、言語管理研究の中でも誰が観察しているのか、その観察の結果として何が起こっているのかということは丁寧に腑分けをしながら議論しなきゃいけないかなと思っています。

フォローアップ・インタビューについては、その効果と限界を確認した上で改めて意義を強調する必要があるのかなという気がしています。以前村岡先生が千葉大のプロジェクト研究報告書でフォローアップ・インタビューについて書かれていたと思いますけれども(村岡、2004)、多分あそこで書かれているようなフォローアップ・インタビューのやり方や手続きについて、相互行為分析をしている人たちにはまだ伝わっていないのかなと思います。

す。つまりすでに起こったことについてやるインタビューというのは、起こったこととはまったく違うインターアクションになっているわけです。にも関わらずなぜやるのか、その場で起こっていないことについて質問するのは何故かということが伝わっていない部分が多いのだと思います。この部分をわかってもらえるとフォローアップ・インタビューの意義については理解してもらえそうです。あるいは言語管理研究の方から、フォローアップ・インタビューを通して過去に起こった相互行為の秩序について考え、まずはそこで起こっている言語問題を記述するというスタンスで議論を始めると、相互にメリットがあるやり方が考えられるのかなと思います。というようなことでもう時間ですね。

大 場：蛇足ですが、問いかけの答えで、日本語教育はカテゴリーについてどう考えるのかについては、研究の目的によると思います。

村 岡：菊地さんと大場さんによる、凄く興味深いプロセス研究の対談でした。僕から見ると、何か、本当はあまり対立していないんじゃないかという気がしているんですけども、まあでも凄く頭がクリアになった気がします。ありがとうございました。

### 3.2. ディスカッション

第2部「言語管理研究とプロセス研究」の内容に基づいて話し合いが行われた。ディスカッションでは言語管理研究と相互行為分析の2つの理論について、次元がそもそも異なるものなのか、相補的な関係なのかという疑問が提示され、議論が行われた。以下にその内容をまとめていく。

#### (1) 言語管理研究と相互行為分析の差異

言語管理研究と相互行為分析は、会話を録音・録画して分析するという点において似ている部分もあるが、異なる点も多い。言語管理研究においては前提として接触場面があり、そこでのやりとりを見ている。一方で相互行為分析では達成される現象を見ている。すなわち、接触場面がいかにして達成されるかというプロセスに目を向けている。目的とアプローチが

異なるため、それを前提として捉えるのか、それは達成されるものであるとして捉えるのかという差があることが言える。

対象とする場面が異なるということも大きな違いである。相互行為分析が対象とするのはいわゆる内的場面である。例えば、Sacks (1967; 1972) は「自殺防止センター」にかかってくる自殺志願者からの相談の電話で「誰も頼る人がいない」という発話がしばしば現れることに着目した。Sacks は「頼る人がいない」という発話が生み出される過程で、成員カテゴリーがどのように用いられ、この発話が成し遂げられているのか、またそれに対して電話を受けた人が専門家としてどのようなアドバイスや語りを加えていくかを分析している。こうした観察は、基本的には母語話者同士の会話を対象としているため、一般的な期待や規範が文化によって異なっているという想定がされていない可能性がある。

一方、言語管理研究では、基本的に異文化間のインターアクションを対象とする。接触場面におけるインターアクションは内的場面とは異なるということを扱っているため、相互行為分析における方法論をそのまま使用することはできない。内的場면을対象に分析を行うことと、接触場면을対象に分析を行うことは、やり方も見るものも変わってくるだろう。

## (2) 方法論の差異

相互行為分析、特に会話分析においては、基本的な問いの掛け方として、「Why That Now」、すなわち「今ここでこの人がこういうことをしたのはなぜか」というところを注視する。そしてそれは、その場で起こっていること、示されていることの中から提示されなければならないという立場をとる。そのため言語管理理論で使用されるフォローアップ・インタビュー（ネウストプニー、1994; ファン、2002）のような事後的な観察に抵抗があるのは仕方のないことだろう。しかし、フォローアップ・インタビューも手続きに則って行う組織的な方法論であり、内省から全てを結論づけるための手法でもない。その場において実際に行われたことを訓練された眼で観察し、なおかつ表層にはあらわれない部分でどのように留意して、評価して、調整していたのかという形で、議論を補強していくという

やり方はあっていいはずであるし、それには意味があるだろう。

### (3) 相補的な可能性

相互行為分析は、その秩序を記述した上でその後どうするのかという部分において、疑問が残る点もある(例えば社会学の権力関係について議論するのであれば、発話連鎖からその証拠を提示することは可能であるだろうが)。一方で言語管理理論においては、問題を分析することによってその問題をいかに解決、あるいは軽減するかということを提案することを目指している。このような差異がありながらも、両理論の目的は全く相反するものではないだろう。例えば、相互行為分析における「修復」というものと、言語管理でいう「調整」を考えてみると、基本的には同じ現象を指している。しかし、相互行為分析では発話連鎖の中でどのような位置づけがされているのかなどから分析をしていくのに対して、言語管理の場合は管理プロセスの中に続いていくという分析をする。やり方が異なることで同じ現象に対しても違った知見が得られるのではないか。扱っている対象が内的場面か接触場面かというような違いを取り上げるだけではなく、どちらも同じような現象に注目することもできるため、両研究を相互に豊かにできるのではないだろうか。

### 注

- 1) 科学研究費助成事業(基盤研究(C))「会話データ分析の活用法の研究——「研究と実践の連携」のための教員養成用の教材開発——」(研究代表者: 中井陽子、平成25-27年度、25370581)
- 2) 例えば、ある集まりを教室場面だと見て理解可能なのは、室内の一人を除いた全員が同じ方向を見ており、残る一人は全員の視線を集めつつ全員を見渡せる位置に立っている、といった非対称性の中に特定の秩序が見出されるからに他ならない。

### 参考文献

大場美和子・中井陽子・寅丸真澄(2014)「会話データ分析を行う研究論文の年代別動向の調査: 学会誌『日本語教育』の分析から」『日本語教育』157号、日本語教育学会、46-60頁

- 寅丸真澄・中井陽子・大場美和子 (2012) 「会話データ分析を行う実践研究論文の社会的意義への言及の考察：学会誌『日本語教育』掲載の実践研究論文の分析をもとに」『2012年WEB版実践研究フォーラム報告』日本語教育学会、1-10頁
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房
- 中井陽子・大場美和子・寅丸真澄・加藤好崇・三牧陽子 (2012) 「会話データ分析のむこう：社会的貢献の可能性を考える」『社会言語科学会第29回大会発表論文集』社会言語科学会、202-211頁
- 西阪仰 (1997) 『相互行為分析という視点：文化と心の社会学的記述』金子書房
- ネウストプニー、J. V. (1994) 「日本研究の方法論：データ収集の段階」『待兼山論叢』28号、日本語学篇、1-24頁
- ファン、サウクエン (2002) 「対象者の内省を調査する(1)：フォローアップ・インタビュー」ネウストプニー、J. V.・宮崎里司編『言語研究の方法：言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』くろしお出版、87-95頁
- 村岡英裕 (2004) 「フォローアップ・インタビューにおける質問と応答」村岡英裕編『接触場面の言語管理研究 vol. 3：千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』第104集、千葉大学大学院社会文化科学研究科、209-226頁
- Goffman, E. (1981) *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Haugen, E. (1956) *Bilingualism in the Americas: A bibliography and research guide*. University of Alabama Press.
- Haugen, E. (1977) Norm and deviation in bilingual communities. In Hornby, P. A. (ed.), *Bilingualism: Psychological, Social, and Educational Implications* (pp. 91-102). New York: Academic Press.
- Jernudd, B. H. and Neustupný, J. V. (1987) Language planning: For Whom? In Laforge, L. (ed.), *Proceedings of the International colloquium on Language Planning*. May 25-29, 1986, Ottawa. Les Presses de l'Université Laval, pp. 69-84.
- Neustupný, J. V. (1978) *Post-Structural Approaches to Languages: Language Theory in a Japanese Context*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Neustupný, J. V. (1985) Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J. B. (ed.), *Cross-cultural Encounters: Communication and Miscommunication* (pp. 44-84). Melbourne: River Seine.
- Neustupný, J. V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and J. Kwan-Terry (eds.), *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution* (pp. 50-69). Singapore: Academic Press.
- Neustupný, J. V. (2005) Foreigners and the Japanese in contact situations: evaluation of norm deviations. *International Journal of the Sociology of Language*, 175-6, Mouton de Gruyter. pp. 307-323.
- Sacks, H., E. A. Schegloff and G. Jefferson (1974) A simplest systematics for the

- organization of turn-taking for the conversation. *Language*. 50 (4), pp. 696–735.
- Sacks, H. (1967) The search for help. No one to turn to. In Schneidman, E. S. (ed.), *Essays in Self Destruction* (pp. 203–223). New York: Science House.
- Sacks, H. (1972) An initial investigation of the usability of conversational data for doing Sociology. In Sudnow, D. N. (ed.), *Studies in Social Interaction* (pp. 31–73). New York: Free Press.
- Weinreich, U. (1953) *Language in Contact: Findings and Problems*. New York: Linguistic Circle of New York.